

「馬」の字音について

三 沢 諄 治 郎

1. はじめに

「馬」という漢字は、字音で「バ」或は「マ」、訓で「うま」と読むことは誰にもすぐ浮かんでくるのであるが、それなら「馬道」(メドウ)・「駿馬」(シュンマ)などの(メ)はどこから来たのかという疑問を起し直ぐ字典を開いて見ると、漢音(バ)・呉音(メ)と出て居り、字典によっては(マ)という音を全然黙殺したり、或は例の慣用音とか通音とか云うことにして片付けているのを見て、何とも腑に落ちかねる感じがした。

嘗て私は昭和の初め頃に「馬」(うま)の方音の分布状況を知ろうと思って日本全国の主なる所に100通ほどのアンケートを発して見たところ、海岸寄りの地方は概して((uma))であり、奥地の方は((mma))と発音しているという大ざっぱな結果を得たことを記憶している。何れにしる馬の実物は大陸から移入したものと聞及んでいるので((mma))という発音は今の中国語の((mǎ))というのと深い関係のあるものに違いないと考えていた。所がその(マ)という字音が漢音でも呉音でもないとして冷遇せられているのを見ると、日本における漢字音というものの取扱われ方は一体どうなっているのかと一応の考察を加えて見たくなる。これを世にいう無用な穿鑿癖ととられることを恐れるが、それよりも自分の専攻する字音史の中の一つの重要な課題として恰も潮流の方向を探知するために、1本のサイダーの空瓶に紙片を封入して海中へ投ずるに似た気持で、手の及ぶ限りこの「馬」1字の字音の動きを追及して見たいと思うのである。

2. 現代の辞書

いつもやる手順に従って、まず基礎的作業として、現代に活用せられてい

る日本の辞書（字書）類の幾つかに「馬」の字音がどう示されているかを検
 することにする。そして又、どうせの序でに比較対照の意味にもなれかしと
 「馬」字と最も縁の近い「麻」の字音をも併せて調べて見ることにする。¹⁾

◎大 字 典（上田・岡田・飯島・栄田・飯田）

〔馬〕	①漢音（バ）	呉音（メ）	（上声・馬韻）
	②漢音（ボ）	呉音（ム）	（ “ ・麋韻）
〔麻〕	漢音（バ）	呉音（マ）	（平声・麻韻）

◎小柳漢和（新修漢和字典）

〔馬〕	①漢音（バ）	呉音（メ）	（上声・馬韻）
	② “ （ボ）	“ （ム）	（上声）
	③通音（バ・メ）		
	④慣用音（マ）		
〔麻〕	漢音（バ）	呉音（マ）	（平声）

◎詳解漢和（服部・小柳）

〔馬〕	①漢音（バ）	呉音（メ）	（莫下切・上声）
	②漢音（ボ）	呉音（ム）	（満補切・上声）
	③通音（バ・メ）		
	④慣用音（マ）		
〔麻〕	①漢音（バ）	呉音（マ）	（莫加切・平声）
	②通音（マ）		

◎字 源（簡野）

〔馬〕	①漢音（バ）	呉音（メ）	（上声）
	②漢音（ボ）	呉音（ム）	（上声）
	③通音（バ・メ・マ）		
〔麻〕	漢・呉（マ）		

◎新 字 鑑（塩谷）

〔馬〕	①漢音（バ）	呉音（メ）	（上声）
-----	--------	-------	------

1) 韻鏡においては麻と馬とは共に第29転の明母に属している。

②漢音（ボ） 呉音（ム） （上声）

〔麻〕 ①漢音（バ） 呉音（マ）

②通音（マ）

◎大明解（長沢）

〔馬〕 （音）（バ・マ・メ）《漢音・呉音を示さず》

〔麻〕 （音）（マ）

◎角川中辞典（貝塚・藤野・小野）

〔馬〕 ①漢音（バ） 呉音（メ） （上声）

②唐音（マ）

〔麻〕 慣用音（マ） （麻韻）

◎大漢和（諸橋）

〔馬〕 ①漢音（バ） 呉音（メ） （集韻，母下切）

②漢音（ボ） 呉音（モ） （集韻，満補切）

〔麻〕 ①漢音（バ） 呉音（メ） （ 〃 ， 謨加切）

慣用音（マ） （麻衣・麻布・麻紙・麻姑）

以上を総合して見ると漢字辞書では「馬」の字音として漢音（バ）呉音（メ），もう一つの漢音（ボ）呉音（ム）とするのが圧倒的である。（バ・メ）の字音は別に驚くことではないが，別音の（ボ・ム）（或はモ）はまことに意外なもので殆どその用例を耳にしたことは無い。然し，現代辞書の大勢がこれを掲げているところを見ると必ずや確たる拠り所があるのであろう。これについては今少し先へ行ってから再考することにしよう。

「馬」字に（マ）の音を取り上げた辞書は「小柳」「詳解」（これも小柳氏担当）「字源」「角川」だけであるのも問題となろう。更に国語辞書の2種を参考として加えておく。

◎新言海（大槻）

①（バ） 馬場・馬術・馬車・天馬・奔馬・馬借・馬頭観音。

②（メ） 馬頭牛頭・馬鳴菩薩・馬道・駿馬・神馬・龍馬・主馬寮。

③（マ） 左馬頭・天馬・伝馬船。

◎広 辞 苑（新村）

“新言海”と殆ど同じ。

〔麻〕（マ）についての別音は見えぬから省略する。

3. 日本の古い辞書

現代辞書の概況を知ったので今度はさかのぼって日本の古い辞書（字書）の類はどうなっているかを検しよう。

◎新撰字鏡（平安前期）

〔馬〕 莫加・麻把二反，上声。

〔麻〕 莫可反，平声。

上の反切では「馬」は（バ）とも（メ）とも或は（マ）とも判ぜられるが、何れにしても「馬・麻」両音の間に深い関連性のあることだけは知られる。

◎倭 名 抄（平安前期）

〔馬〕 四声字苑，麻之上声。▲爾雅注「牝馬」和名（米万）。

〔麻〕 音磨。

これにも「馬・麻」両字の字音の近いことが示されている。但し、牝馬を（メマ）とすれば馬を（マ）と読んだのか或は（メウマ）の省略なのか明らかでない。

◎法華経单字（平安末期）

〔馬〕（メ）万価（切）。 〔麻〕（マ）无加（切）。

この書の字音は概して“呉音”と称せられるものが多く、反切語の「価」は漢音（カ）呉音（ケ）と解せられる。

◎聚分韻略（鎌倉期）

〔馬〕 馬牛（ハ一） 《これはバの表記である》

〔麻〕 麻（マ）

◎法花音義（吉野時代）

〔馬〕 馬（メ）

〔麻〕 麻（マ） ▲価（ケ） 家（ケ） 牙（ケ）の例がある。

◎温故知新書（室町・文明頃）

〔馬〕 馬遠（ハエン） 馬蘭（ハリン） 馬上蓋（ハシャウサン）

白馬節会（ハクハノセチエ） 馬嫁（ハカ）。

〔麻〕 麻面（ハメン）

◎運歩色葉集（室町，天文頃）

〔馬〕 馬形（バギャウ） 馬面（バメン） 馬借（バジャク）

馬蹄（パテイ） ▲馬借（マガシ）

その他の節用集（堺本・鰻頭屋本・易林本・乾本等）は殆ど運歩色葉集と同趣なのでここには省略する。

◎書言字考節用集（江戸，享保頃）

〔馬〕 馬刀瘡（バー） 白馬（ハクバ） 右馬飼（ウバカヒ）

馬場（ババ） ▲馬頭（メヅ） 馬刀蛤（マテー）

〔麻〕 麻木（マー）

これらによれば「馬」の漢音（バ）呉音（メ），時に（マ）とも読み，「麻」は大抵（マ），時に（バ）とも読む点で各書にあまり差はない。

江戸時代になると漢字音の特別な研究が盛んになって，音韻書の研究と共に中華の正音に頼ろうとする態度が著しくなり，その点で平安時代の「新撰字鏡」や「倭名抄」の昔に復帰した状態となった。平安時代のは字音を示すのに反切を以てしているので，仮名のように音価を明らかにすることが出来ないだけである。

さて，江戸時代の韻学者の示したところを掲げると，

◎正字類音集覧（釈契沖，元禄頃）

〔馬〕 唐音（マア）。

〔麻〕 唐音（マア）。

これは当時の中国の実際音馬 ((mǎ)) を写したものであろう。

◎三音正譌（釈文雄，明暦頃）

呉音〔麻〕（メ）〔馬〕（メ）。（マ）トスルハ非ナリ。

◎磨光韻鏡（釈文雄）

〔馬〕 漢音（バ）莫下切，呉音（メ）莫下切。

〔麻〕 漢音（バ）莫霞切，呉音（メ）莫霞切。

◎漢呉音図（太田全斎，文化頃）

〔馬〕 漢音（ビヤ>バ），呉音（ミヤ>メ）。

左は拗音，右は直音である。（ビヤ）から（バ）となるなら，（ミヤ）からは（マ）となる筈と思うが不審である。この外，漢・呉音以外の場所に（マ）を掲記している。

これも序でに後世ながら同系の韻図を示すと，

◎隋唐音図（大矢透，大正頃）

〔馬〕 漢音（バ），　　呉音（マ）。

〔麻〕 漢音（バ），　　呉音（マ）。

大矢博士のは詳しい説明がないので明らかでないが，その字音は我国に行われた中古の経文に附されたものに依る由である。馬の呉音に（メ）を採らず（マ）とした所は特に注目せられねばならない。

4. 漢土の韻書と方言

日本の中古の学者や近世の韻学家たちが拠って以て絶大の規範とした漢土の韻書の類はどうであろうか，試みに，字音を総合的に示したものとして隋唐以来の韻書を開いて見よう。

◎切　　韻（王三をとる）（唐の神龍頃，8世紀初）

〔馬〕 莫下反。　　〔麻〕 莫霞反。

前にも述べたが，この二反切は同音であることを示してはいる，然し莫には（バク）（マク），下には（カ）（ゲ）の両音があるので，莫・霞・下に対する唐代音価の決め次第で（バ）とも（マ）とも（メ）ともなる。

◎説文篆韻譜（五代）

〔馬〕 莫下反。　　〔麻〕 莫遐反。

◎広　　韻（北宋）＝「切韻」と同じ。

◎集　　韻（北宋）

〔馬〕 母下切。 〔麻〕 謨迦切。

この両切も同一音価を生じて判別し難いことは「切韻」の場合と同じである。

上に挙げた韻書類の反切は中古の読書音と呼ばれるもので、実質的には必ずしも隋唐宋の当代音を正しく表わしたものではない。当時の実際音を知ることが容易でなく、随って日本に伝来したこれらの字音の実際音価を探る仕事も非常に困難なものではあるが、少なくとも唐代首都の実際音と思われるものを示す一二の特例が無いでもない。

その一つは、唐代の長安方言を示すといわれる

◎慧琳一切経音義（唐）

である。これによれば、

〔馬〕 麻[・]把反。

〔麻〕 麥[・]巴反・馬[・]巴反・罵[・]巴反。

で、馬と麻とが相互反になっているから、この二字が（アクセントを除外すれば）全く同音といってよいことを語って居り、恐らく（バ）（マ）の両音のうちの何れかを示すのであらうと思惟せられる。

今一つは、唐代に西藏（吐蕃）との会盟が行われた記念碑、有名な

◎唐蕃会盟碑（823年立碑，唐，長慶3年）

の中の人名音訳の文字で、この碑の外に、敦煌出土「千字文・金剛經・阿弥陀經・大乘中宗見解」を合せて所謂『唐五代西北方音』の示す音である。これらには馬字・麻字は直接に示されていないけれども、韻の方から考えれば、

〔下〕＝馬と同母韻である“下”が千字文ではチベット音 ((ha)) に当てられている。

〔嘉〕＝麻と同母韻である“嘉”が千字文ではチベット音 ((ka)) に当てられている。即ち何れも母韻は ((-a)) である。又、頭音の側から見れば、「唇音の清濁音」即ち「明母」は二種に分かれ、

(イ) 明 ((meñ)) 明 ((mye)) (千字文)

(㊦) 武 ((bu)) (会盟碑) (大乘中宗見解)

摩 (('ba)) 漠 (('bag)) (千字文)

(㊦) 門 ((mon)) 門 (('bun)) (千字文)

文 ((mun)) 文 ((būn)) (会盟碑)

即ち(㊦)は音節の終りに((n・m・ng))などの尾韻のあるもの、これはチベット音で((m-))を頭音とし、(㊦)は尾韻のない音節で、これはチベット音の((b-)) (('b-))を頭音とする。(㊦)尾韻のある「門・文」の如きは(㊦)(㊦)双方の特色を兼ねている所から見ると、この形は中間過渡的な姿であることが知られる。

以上のことを日本の漢字音の頭で解釈して見ると、唐・五代の頃の長安地方の方言のうち「唇音の清濁音」はマ行に発音するものとバ行に発音するものとの二種類があったということになる。殊に(㊦)の方の「摩・漠」はチベット音 (('b-))に当り、これは((b-))音節の“ゆるい声立て”¹⁾と云われるものと思われ、((b-))の前に唇を閉じてゆっくり((b))を発音するものと理解せられる。(下記の羅氏解説参看)。

して見れば「唇音の清濁音」は魏晉南北朝までは((ma))であったのが次第に二つに分かれ((ma))と((mba))となり、更に((mba))の((m))が消えて((ba))となったと考えられる。この現象を水谷教授は“非鼻音化”という表現をせられ、この現象は早く隋唐の頃から訳経の面にあらわれていることを発表せられた。²⁾

この「唇音の清濁音」の語頭について現代の各地方音を観ると、

北 京 音 (麻) ((má)) (馬) ((mǎ))

江 南 音 (金華) (麻) ((ma)) 陽平, (馬) ((ma)) 陰上。

アモイ音 (麻) ((ma)) ((bba)) 陽平, (馬) ((ma)) ((bbe)) 上声。

広 州 音 (麻) ((ma)) 陽平, (馬) ((ma)) 陽上。

1) 研究社“世界言語概説”下巻, p. 960, 「ゆるい声立て」(gradual beginning)。

2) 水谷真成“唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程”(東洋学報, 第39巻第4号)。

であり、アモイ音には（バ）（マ）の二音が見られる外、馬（(bbe)）という音も見える。これは日本呉音の（メ）に近いものであろう。

嘗ては **Karlgren** 氏が調査し、後に又、羅常培氏がその『唐五代西北方音』の中にも用いた方音表を見ると、

山 西 省 文 水 ((mb-))

 興 県 ((mb-))

という語頭音があり、これらについて同書の中に羅氏は次のように解説している。（中文を今拙訳する。）

○「明・泥・疑三母の読法」前に引用した 4 種のチベット音の中で、およそ明母字の ((-n)) 或は ((-ñ)) 収声の附かないものは皆 ((‘b)) と対応し、泥母字の ((-m)) 或は ((-ñ)) 収声の附かないものは皆 ((‘d)) と対応し、而して疑母字は収声を論ぜずいかなるものでも一律に凡て ((‘g)) に変ずる。この類の声母の変読は、思うに唐五代西北方音の一種の特徴であったと考えざるを得ない。私は前文に於いて、この ((‘b)) ((‘d)) ((‘g)) の前方に在る ((‘)) 符号は、鼻音成素を含有したものであることを既に証明し、これに因って、この三母の読音は、現代の文水・興県・平陽の ((mb)) ((nd)) ((g)) に近いものに違いないと悟ることができた。われわれが従来所有して来た方言資料の中で、前に挙げたところの三つの山西方言以外の陝西・甘粛の方言にはそのような佐証は見当らない。最近、白滌洲先生が陝西へ赴いて調査を行われたが、陝北の安塞・延川・清澗・吳堡・綏徳・米脂などに於いても、やはり類似の読法がある。これは即ち唐五代の沙州附近の方音から一脈相伝え来ったものである。もし、われわれが、他日、現代の西北方音をば全面的に精細に調査することを得たならば、思うに、敦煌から東へ、長城の内側に沿うて、必ずやこの種の声音の変転に対し一条の手がかりをさぐり出すことができるであらう。¹⁾

1) 羅常培“唐五代西北方音” p. 142—3。三沢云、収声とは尾韻のこと、又 ((ñ)) は ((ng)) に当る。

5. 周秦漢の古音

唐代から更にさかのぼって上代の古音を探るべく、高畑彦次郎博士の著『周秦漢三代の古紐研究』を繙くと、

〔馬〕（上代音）((mǎ))

〔麻〕（ 〃 ）((ma)) 〔摩〕（上代音）((mwâ))

と見え、古紐即ち上代の頭音は、明母字即ち「唇音の清濁音」では、おしなべて((m-))と推定している。

次に、時代は少し降るが、漢晋代の訳経音を満田博士の『支那音韻断』によって明母に属するものを拾うと、

目((mog)) 莫((ma)) 摩((ma)) 文((mu)) 昧((ma))

とあり肝腎の馬・麻そのものは見えぬが、今対照の為に並母即ち「唇音の濁音」を拾うと、

毘((bi)) 頻((vi))

と何れも相当に頻用せられ、((b))は重唇音、((v))は軽唇音であるが「清濁音」の((m))と截然たる差があることを示している。¹⁾

以上さまざまな事柄を乱雑に並べたが、今姑く時代順に整理して卑見を述べて見ると、

- (1)中国上代（漢晋代）における「馬」の字音は((ma))であっただろう。
- (2)この音は早くから日本に伝えられたことと考えられる。
- (3)六朝においては、この((ma))という字音は政治文化の中心地の移動により、自然に北方を去って南方江南地方に移り、南方の土音とは別に、古典音として文化の流動の中に根強い命脈を保ちつづけたことと察せられる。この頃の明母がやはり((m-))であったことは前記満田博士の南北朝時代訳経音に明らかに示されている。
- (4)一方、北方（黄河を中心とする地方）では、その地方の土音を主軸とする字音の変動が行われ、隋唐になると、政治・文化の中心地の北方復帰にと

5) 藤堂明保博士の“漢字の語源研究”にも上古音として馬((mag))を収めている。
(p. 45)

もない、新音と旧音との混合現象が生じ、これの整理作業が行われたが、実用の面では北方独自の転音が生じ、明母にも ((m-)) と ((mb-)) との二態が生じた。((mb-)) 音はチベット音の“ゆるい声立て”に類した発音癖に近い。

- (5)日本の学僧たちで唐代に彼地に留学した者は明母の新音 ((mb-)) を習得してこれを当代の正音として持ち帰った。
- (6)その新音は即ち日本へ「馬」((ba)) (バ) として移入せられ、学僧や儒者たちはこれを“漢音”と称して正音と受取り、従来の ((ma)) (マ) を却って俗音と見た。
- (7)その頃は馬と同頭音の「麻・摩」も漢音(バ)として受入れられた風である。
- (8)然し、馬 (バ) という音は、公式の官用語や儒者たちの間にのみ用いられたので、後に述べるような理由により、(マ) が根強く生き残り、学者たちも (マ) を無視することが出来なくなり、(マ) と (バ) とが共に力を競って「マ系」と「バ系」との二様の読み方が行われ、「天馬」(テンマ) (テンバ) の如く同一語で (マ・バ) 両様によむことも行われた。
- (9)それと共に、これもまた後に述べるところの (メ) という音が仏経と共に伝来し、結局 (バ・マ・メ) という三音が対立した。
- (10)ただし、麻字は (バ) よりも (マ) の方の勢力が強く (マ) とよむ場合が圧倒的であった。
- (11)他面、(マ) は伝来が古いため日本に土着し和語と同じように見られるに至った。それは「馬」(うま) という動物そのものが「ま」という名称と共に日本のものとなってしまったからである。
- (12)動物の「馬」を「うま」「むま」「ま」と呼ぶことについては次項において考えたい。

6. 馬 の 伝 来

(マ) という字音を考える上において、動物としての馬そのものが何時頃何処から伝えられたものであるかを一応調べて見る必要がある。馬の伝来に

については既にそれぞれの専門的研究があることと思うけれども、ここにはその詳細な叙述を援く必要はない。従来の諸説の帰結を簡単に知ればよいので、主として『日本歴史大辞典』の馬の項から大略を引用させて貰うことにする。

- (1)“魏志倭人伝”には「その地には牛馬虎豹羊鵠無し」とあるが、考古学的には縄文式遺跡から馬歯が出土しているので日本にも、古くは野生馬が棲息していたことがわかるという。
- (2)然し、次の弥生式文化期には馬関係の検出物が極めて乏しいというから、野生馬も追々絶えかけたのかも知れない。
- (3)次いで、古墳時代には、概略的にいうと、馬具・埴輪馬・壁面絵画・石馬などが多いが、古墳時代の中期には数少ないその馬具の殆んどが大陸からの輸入品であることと、中期末以後には馬具の副葬品が多い、云々。
以上の事から考えると、野馬の時代と大陸からの輸入馬の時代とがあったらしく、宮崎県原野には今日に於いても野生馬が居るそうで、専門家の話ではシベリヤ大陸から陸つづきの時代に入って来て内地にも野馬が棲息していたのだという。
- (4)日本書紀、神代の巻の一書には、保食神（うけもちのかみ）の屍体から牛馬が化生したという神話が記載されているが、それは野馬が人間の生活圏の中に入りこんだ時代を表現したものであろう。
- (5)進んで、雄略・皇極・天武紀になると、馬が袂や神祭に用いられた例が多いということで、それは馬が追々人間の日常生活に無くてならぬものとなる過渡的な状態であったろう。
- (6)又、古く、応神紀以来朝鮮を介して馬の輸入と馬飼育の技術の導入とが行われ、馬は牧による育成と共に大陸や半島から良馬の輸入が要求せられたことは馬具の輸入と相待って騎乗用の良馬を物語って居よう。
- (7)それ以後の時代には馬飼育の専門家が帰化し、馬が駅馬・伝馬として交通機関に用いられ、更に軍用として重視せられ、馬飼育が奨励せられ、平安初めには馬寮が置かれた、云々。

一体、馬は和名抄に「四声字苑云、馬^〇南方火畜也」とあるかと思うと、室町時代の下学集には北方胡^〇地の産であるが故に「胡^マ馬」という、句に「胡馬嘶北風、越鳥巢南枝」とあるのがその証だと云っている。然し胡馬（ウマ）の説は信じ難い。

さて、先秦時代以前の馬の名称が何であったかは知り得ないが、漢土では既に漢魏以前の上代に於いて「馬」字は((ma))であったと推定せられている。(前記高畑説)。朝鮮の現代音も((ma))である(古い字音は明らかでない)。従って応神紀頃の馬は日本語の中へ((ma))という字音で移入せられたのではなからうか。もっとも、「馬」字は唐の時代に((ma))と((ba))とに分かれかかっていたので、その頃の一つの過渡的な姿として((mba))という変態音節が現代にも((ma))((ba))の間にまじって西北方音の一つとして残っていることを考えると、唐代から今日まで1千年以上もそのまま変わらず生き残っているのに一種の驚きを感じる。

ひるがえてこの文の“はじめに”の所で触れたように、古来、日本には「馬」に対して「うま」「むま」という二様の表記があるが、「むま」というのは「うま」の単なる別体表記ではなくて、((ma))に対する((mma))であったろうことは今日では既に常識の域に入っている。この((mma))という発音は甚だ複雑な意味を持っているもので、日本語としては((uma))にしても((mma))にしても2音節の語である。これに対して漢土の((ma))は1音節語、((mba))という発音にしても中国語としてはやはり1音節である。この((ma))が言葉として日本に入って来た時に日本ではこれをどのように受け取ったかが問題である。一体((ma))という発音が((mba))と変じたのは((ma))という音節がゆっくり発音せられたが為めであり、今日でもこの語は上声(第3声)であるから昔の面影を残していると云ってよからう。殊に音の初めをゆっくり発音すると((ma))の前にもうひとつ唇を閉じて、じっと待期する時間が生じ、自然に((mma))という音節になり、中国語としてはこれもまた1音節なのである。そこで((ma))>((mma))>((mba))という経路が想定せられ、漢土では、((ma))((mba))が存して((mma))が消えたが、日本へは((ma))と((mma))

の形の時に輸入せられ、((mma))は日本流に2音節語に変わり、更に変わって((uma))となり、すっかり日本語と化したのが、((ma))の方はそのまま1音節の形を保ち「馬」字の字音として残ったのではなからうか。少くともそうした可能性は十分考えられると思う。

日本の方言として「牝馬」のことを(ダンマ)と言い、「牡馬」のことを(コンマ)という所が多い。殊に前者は東北地方から鹿児島・奄美大島にまで及んでいる。¹⁾ (ダンマ)は元来“駄馬”の義で、乗用の牡馬に対し運搬用馬の意であることはわかるが、(コンマ)の方は「駒」という字が宛てられ、乗用の男性馬を指したと見える。推古女帝の御歌に、

字^マ摩^マならば日向^マの古^マ摩^マ
太^マ刀^マならば呉^マのま^マさ^マひ^マ²⁾

とあるように、理想的な馬として「駒」(コマ)がうたい賞められている。駒という漢字そのものは和名抄に援かれた王仁煦切韻にあるように“馬の子”であり、和名として(古万)が宛てられている。当時「馬」が((ma))であるならば「子馬」は(コマ)であり、又若し「馬」が((uma))であるならば「子馬」は(コウマ)であり、((mma))であるならば「子馬」は(コンマ)であろう。若い2・3才の牡馬が騎乗用として秀れていたのなら、牡馬を(コンマ)と呼ぶ方言は古い形を伝えるものではあるまいか。又、「駄馬」も((damma))を示して居り、これを(ダバ)という如きは後世風の漢音よみに属するものである。

但し、ここに最も注意せねばならぬことは、「馬」字が日本に伝わった時にその字音((mma))が日本語として土着すると、それが日本流には2音節語であるために((u-ma)) (字摩)と表記せられ、後世の学者たちによって(マ) ((ma))の場合は((u-ma))の上略音であると認識せられてしまったことである。ちょうど、これは1音節語の「渋」((sip))が日本語に入って2音節語の(しぶ)となり、同じように「絹」((kien))が(きぬ)となり、「菊」((kiuk))が

1) 東条操氏“全国方言辞典”に拠る。

2) 日本書紀，推古紀，歌謡。

(きく) となったようなもので、ただ違うところは馬の ((mma)) が表記せられる時に 1 音節語の (マ) と、2 音節語の (ムマ) (ウマ) ともなったこと、これは ((mm-)) という二合唇音が認識せられる時の都合で 1 音にも 2 音にも受取られたからであろう。

そこで、「馬」に (マ) 音があり、又 (ムマ) 音があるとすると、学者たちは (ムマ) は日本語で、(マ) はその略音であるとして処理したのである。「渋・絹・菊」を日本語化した 2 音節語として処理することが妥当であると同様に (むま) (うま) を日本語化した音節として処理することは許されようが、漢土から伝えられた (マ) をも同じような意味で日本語化したものと見ることは許されまい。これを (うま・むま) の略であるとする時は、どこまでも和語の問題となって、それでは字音の埒から除外されてしまう。若し、これを漢土の ((ma)) の伝来したものであると見るならば、どこまでも字音として取扱わなければならぬわけである。

これに最もよく似た例は「梅」(うめ・むめ) の場合である。日本書紀には (メ) の仮名として「阿梅」(天) などと用いられているが、万葉集には (うめ) の表記に (梅) の外、(宇米) (汗米) (有米) 又 (烏梅) (字梅) が多く用いられているのは、元来「梅」の字音が ((mme)) であったのを、時に 2 音節と見て (梅) 一字に代え、時に一音節と見て (烏梅) と表記したのである。

「馬」の方は、古事記に仮名としての使用例はないが、日本書紀には「阿箇悟馬」(赤駒) という一例がある。¹⁾ これは言うまでもなく「馬」(マ) を字音と見たのに他ならない。そこから見ると万葉集で

宇 馬 (馬) 第14巻 3538番。

古宇馬 (子馬) 同 3537番。

古 馬 (駒) 同 3387・3539・3542番。

などの使用例が見えるのも同様のものと見るべく、即ち上の場合は「馬」は 1 音節の字音 (マ) を意味するものに違いない。然るに春登上人の『万葉用

1) 天智紀の童謡。

字格』では「マ」の部に「畧音」と標して“万・満・末・麻・摩・馬”の六字を出し、下に「麻以下三字通音也」と注し、同書凡例に「それが中に通音転音の類はもとより本音ならねば略音の下にかね載せつ。」とある。これは漢音（バ）呉音（メ）を正音とする立場から言っているのだから、万葉集には「馬」が（メ）としても用いられているので（バ）（メ）以外はすべて正音ならずという考に立つものである。但し、「麻・摩」をもその格で律しているのは漢音（バ）呉音（メ）を堅持するもので（マ）を一切認めぬという強硬態度と思われる。現代の『万葉集大成』において（宇馬）（古宇馬）の（馬）をば“仮訓”とし、（宇梅）（烏梅）の（梅）（メ）を“仮名”としているのも通じにくく感ぜられる。これらは恐らく「馬」（マ）は字音にあらず、日本語化した字訓なりと見ているからであろう。

上のような複雑な事情は歴史という幾重にも重なり合ったカーテンにさえぎられて、学者たちの分類の手に余ったものと考えられる。それ故に「馬」に対する（マ）音を呉音と見たり、或は慣用音・通音として食客扱いをしたり、或は純然たる国語の領分に入るものとして漢字音から除外してしまうような現状になっているのである。

7. 「馬」の別音

さきに現代の辞書を一見した時、「馬」の字音として（ボ）（ム）を挙げた辞書が相当にあった。これは古音として取り上げたのであろうと思うが、今『集韻』に「満補切、音姥」（ボ）とあるのがその拠点であろう。「満」は「唇音の清濁音」ではあるが頭音では暮・武・晩・万・蛮などの一類であるから、漢音としての頭音が（b-）となるのに不思議はない。そうすれば「馬」満補切（ボ）、又、これに対応する呉音を割り出すと、「万」（バン・マン）の格で（bo）対（mo）となる道理であるけれども、この反切の韻字「補」は漢音（ホ）呉音（フ）であるから「暮」（ボ・ム）の格で満補切では呉音（ム）となるわけである。この呉音が実際に在ったかどうかは明らかでないけれども、「詩の鄭風，叔于田」に（野・馬・馬・武）という通押がある以上（武）

の呉音（ム）と（馬）の呉音（ム）とは無縁なものではあるまい。同列の字音には、布（ホ・フ）簿（ボ・ブ）都（ト・ツ）奴（ド・ヌ）などがある。又、もろもろの辞典が（ム）とした中に大漠和が（モ）として居るのは注目すべきであろう。漢音の（ボ）の生じた経路は $((ma)) > ((mba)) > ((ba)) > ((bo)) > ((bo))$ かと思われるので、ひとまず（ボ）は（バ）からの転化ということになる。現代江南地方の方言に「馬」 $((mo))$ とあるのも $((ma)) > ((mɔ)) > ((mo))$ という転化系統であろうと考えられる。

なお、飯田博士の『日本に残存せる中国古韻の研究』に依れば「馬」（ボ）の用例として『無縁雙紙』巻一に“疲馬懶牛”（ハボランニ）巻五に“経馬等”（キンボテン）という読音を出しているけれども、後年の同氏著『日本に残存せる中国近世音の研究』によれば無縁雙紙という書は「曹洞臨済宗用」の書で、日本の足利義尚歿後に編纂されたものであるというから、其の他の読み方から考えても、この書に盛られた異常な字音は多分に宋代以後の読音に類すると認められるし、右に挙げた『中国近世音の研究』には同じような材料から抜いたものに“^ハボランニウ”“^{キン}バテン”“^{キン}ホテン”“^{セキジュ}バタク”“^マハナエ”など（マ・バ・ボ）の諸音が混じて居り、多分中古の音の残存かとは思うが（ボ）に対する説明のないのが遺憾である。

ただこの転音（ボ）が必ずしも唐代あたりから新しく生じたものでないようにも思われるのは、右の飯田博士の『古韻の研究』の方に次のように『詩経』と『書経』との用例が挙げられて居り、

「詩経・周南・漢広三章」（楚・馬）

「書経・五子之歌」（下・婦・予・図・馬）

これに依ると「馬」 $((bo))$ という字音は既に先秦代から存したことになる、少なからぬ昏迷を感じさせられる。この例は多分『江氏音学十書』から得られた資料かと思うが、今、顧炎武の『音学五書』の「詩本音」を閲すると、（楚・馬）の押韻を掲げ、馬は「古音莫補反，姥ト同ジ。考フルニ，馬字，詩ニ凡ソ十四見，書ニ一見，易ニ一見，左伝ニ二見，楚辞ニ二見ス。並ビニ今ノ三十五馬ト同ジク，踝・瓦等ノ字ト混ジテ一韻タリ。」とある。更に同書の

「唐韻正」巻九「馬」の項を見ると、上に挙げた群經の用例を一々掲げた末に「史記索隱^リニ、姥、毛伝ニ凡ソ馬ハ皆読ムコト姥ノ如シ。」とある。

これらを総合すると、「馬」(バ)(ボ)の両音は唐代以後に生れたものではなくて先秦から並び存した様子である。ただ、(ボ)(ム)などは当時の別音として方音的な地位のものではなかったろうか。

8. 「馬」の 呉 音

もう一つ「馬」の呉音として広く伝えられるものに(メ)があり、日本では馬^メ鳴菩薩の如く仏經の読音として普及して居るが、馬寮・主馬など(バ・マ)音とも並行して普通語の中に用いられても居る。すでに(マ・バ・ボ)等を考察したので、(メ)はどうして成立したかを考えねばならぬ段階に来た。

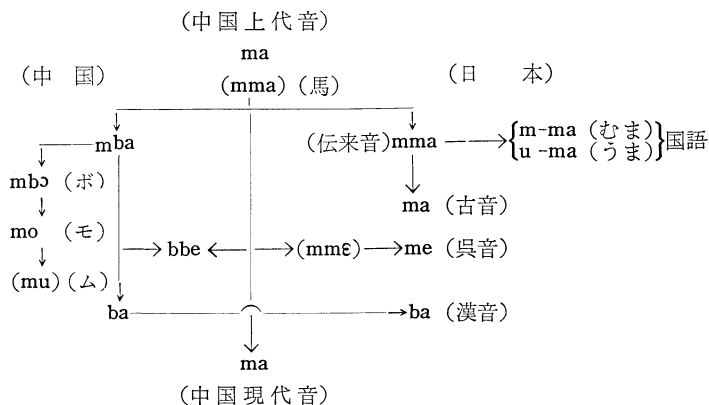
思うに、現代アモイ音の中に稀に「馬」((bbe))という方音があるだけで古典音としては一向に見受けられない所から推すと、((me))((bbe))は地方的な訛音が、やがて或る時代に定型化して、主として南方において使用せられたのが、時代と共に消え失せたものであろう。それが古い時代に仏經の読音として日本に渡り、呉音として迎えられたのではあるまいか。この外更に知るところが無い。

元来((me))という音頭から見ると、必ずや((ma))から発し、途中((mæ))((mɛ))という中間音を経て((me))となったものであろう。或は古い時代の中
国音で((ma))を((mɛ))に近く発音したのを日本の於いて((me))として受け取ったのかも知れない。これは音節受け渡しの時に起こる音域の問題で、((ma))~((mɛ))を((mɛ))~((me))として受取ることは十分に在り得る。この事は日本の上代における特殊仮名遣いにも関連する問題だと考えるが、ここでは言及することを避けておく。

今、(マ・バ・メ・ボ・ム)の関係を推定して一つの系統図を作ると次のようにならうか。

- 1) 唐の司馬貞の音義。

(カッコ内の音は用例未見のものである。)



一体、漢字の性格から云って ((-a)) の韻が ((-e)) の韻に転化する例は相当に多い。(勿論その逆の場合を考えることもできる。) 今、若干の例を挙げると、

カ・クワ>ケ・ゲ (家・下・化・瓜・花・価)

サ>セ (斉) タ>テ (帝)

ハ>ヘ (覇) マ>メ (馬・米)

カ・ガ>ゲ (夏・牙・雅) ダ>デ (代)

即ち、万葉仮名として ((-e)) の音節に使われているものが少なくない。

9. 漢音・呉音の粹

さて、以上たどり来ったところを振り返って見ると、まずその複雑さに驚くと共に、こういう複雑な字音を辞書の中に採り入れる段になると、まことに容易なものでないことを更に痛感せざるを得ない。

これは何故であろうかを考えて見る。古来我国には「漢音」「呉音」という厳然たる字音の粹が存在して、いかなる漢字音でも原則的にこの粹によって処理することが長い間厳重に行われて来たためであろうと思う。昔、漢音誦習を強制して詔を下されたことさえあったそれ程に、国語に対する政策め

いたものが活動し、儒者は漢土の古音を数多く知ることに腐心し、何れを正とし何れを俗とするかは先学の教によって長い伝統があり、仏経は仏経で、伝誦の間にこれまた師資相承して一步もゆるがせにせぬ趣があった。それにも拘らず字音は時と所とを換えるに従って変貌をやめず、一方に新音あらわれると、一方に死滅する字音があり、伝統の力でも抑え切れぬ所が生ずるのは、各方面何事でも同様であるわけだから、これらの複雑な字音群の処理には悲鳴を上げざるを得なかったのだと思う。

それ故、現代の辞典における漢字音表記の態度は、ただ有らん限りの古典音を並べ立てるのではなくて、自然に何らかの決定が行われ、

- (A) 漢音・呉音だけを正音として示す。
- (B) 中国の字典に依拠して古音をも広くとり上げる。
- (C) 日本において現代実際使われている字音のみをとり上げる。
- (D) 漢音・呉音以外のものを「通音」「慣用音」として収める。

と云ったような数種の態度が生ずるのである。

而して、漢音・呉音を必ず示すという建前からは相当に無理な結果も生じて来るわけで、その顕著な例としては太田全斎の「漢呉音図」のように強いて機械的に字音を作り上げるという例さえあった。

近時において「漢・呉音」の区別を示さぬ辞典のあらわれたのは、そうした欠点を避けたものではなからうか。

10. 結 び

殆んど結語を綴る必要がないまでに各項で詳しく述べたが、要するに、辞典でお粗末に扱われた「馬」(マ)という字音は、中国の上代から現代に至るまで厳として変らぬ一系統であり、始め日本はこれを((mma))と受けて国語(むま)(うま)を生んだが、字音として定着した((ma))は決して消えたものではなく、例えば馬屋(マヤ)馬淵(マぶち)馬放(マはなし)などの語初の(マ)を(うま)の略(広辞苑)とするのには軽々しくは賛成しがたい。それでは一方に漢和辞典類の「慣用音」に(マ)を掲げているのと矛盾

することにもなる。

日本書紀や万葉集での用例のように、上代に「馬」を(マ)の音仮名として使っていたことは何としても動かせぬ事実で、語彙によっては国語の(むま)(うま)の上略という用法があったかも知れぬが、すべての「馬」(マ)を皆国語音扱いにするのはどうかと思う。青梅(アヲウメ)>(オウメ)の梅が国語音の略音だとしても、だからと云って宇梅(うめ)の「梅」(メ)を国語音とすることの妥当でないことは第6項で挙例した通りである。

つまり「馬」(マ)という字音が日本の国内で土着し、やがて二分して、一は国語の((m-ma))となり、一はそのまま字音の((ma))として残ったのだが、不幸にして、その字音に対応する純日本語が無かったために(むま・うまは字音から変化したもの)使用度が頻繁になると((ma))と(むま・うま)との区別が混乱し、何れが国語、何れが字音とたやすく区別しがたくなり、後世ではその処置に困り、或は通音とし、或は慣用音としたのであろうが、(マ)を思い切って削ってしまうのは何としても武断過ぎはしないか。中国では上古から現代まで、北方も南方も「馬」((ma))で変らず一貫しているのに、日本では字音として((ba))と((me))としか無く((ma))はこれを取り上げるわけに行かぬというのも聞えぬ話だと思う。

さて、それならば(マ)という字音を漢音・呉音の何れに入れるべきかとなると、これまた困難な問題である。要するに漢音・呉音という歴史的な冷たい鉄の棒がこういう困難を生んだので、もし何等かの名称がどうしても必要であるのならば“古音”という名を与えるべきであろうか。

(1965. 12. 12 稿)